

## いざ羽衣石城・南条の元へ

鳥取城落城の直後10月26日のこと

### 【信長公記】

「十月廿六日、伯耆国に南条勘兵衛、小鴨左衛門尉、兄弟兩人為御身方居城候處、吉川罷出南條表取巻之由注進候。眼前に攻殺させ候てハ、都鄙之口難無念之由候て、羽柴筑前守、後巻罷立、東西之膚ヲ合、可及一戦行にて」

「10月26日、伯耆国に南条元統と小鴨元清の兄弟が、織田の味方として居城している。そこに吉川元春自らが攻めに来た。まさに救援に行かずして、これを織田方として見殺しにしては、都や田舎の人々から非難される。羽柴秀吉後巻としていで立ち、織田軍が毛利軍の領国・伯耆に入り東（織田）と西（毛利）が膚を合せて一戦交える。」

### 【信長公記】

織田信長の経歴の正確な実録を目指した軍記。永禄11年（1568）の信長上洛から天正10年（1582）の本能寺の変までを記す。著者は信長に仕えた太田牛一。

### 【羽柴秀吉】

のちに三英傑の一人・豊臣秀吉となる。農民身分から織田信長のもとで戦功を立て、大名へと出世した折に木下姓を羽柴姓に改めた。本能寺で急死した織田信長の跡を継いで天下を統一し、近世封建社会の基礎を築いた。（初代）武家閥白、太閤とも呼ばれる。

### 【吉川元春】

毛利元就の次男。初陣から76戦無敗の伝説をもつ。吉川家の養子に入り、弟の小早川隆景と共に、本家長男の毛利隆元とその息子・輝元を支えた。主に山陰地方を拠点に活躍し、毛利家を西日本最大の大名に押し上げることに貢献した。

### 十万寺城跡への行き方

JR松崎駅から登山口まで車で約15分  
登山口から登山道を徒歩約40分

## 元春と秀吉の対陣

伯耆国羽衣石城を拠点とする国人領主の南条氏は、戦国時代には毛利氏と手を結び、出雲の尼子氏滅亡後は、伯耆三郡を支配する毛利氏山陰支配の一翼を担う存在であった。

天正3年（1575）、当主の南条宗勝が病死して元統が跡を継ぐと、織田信長による調略が開始された。元統は同7年に毛利方の家臣を討伐し、織田方への寝返りを鮮明にした。南条氏を味方に引き入れた翌年、織田信長家臣の羽柴秀吉は因幡へ侵攻した。

天正9年（1581）6月、秀吉は2万余りの兵を率いて第2次鳥取城攻めを開始し、城兵への兵糧攻めに成功する。毛利方の吉川元春は、鳥取城救援のため月山富田城から兵を東へ進めた。吉川勢はまず南条氏の羽衣石城攻略を目指し、10月25日には馬ノ山に陣を布く。そしてさらに前進しようとしていたところに、鳥取城落城と吉川経家自刃の知らせが届くことになる。

その頃、秀吉は姫路へ帰陣の準備を整えていた。そこに南条元統とその弟・小鴨元清から助勢要請が届く。それは吉川元春が、羽衣石城攻撃の準備をしているという内容であった。

秀吉は10月27日、高山に着陣し馬ノ山の吉川元春と対峙したと、江戸時代の地誌類に書かれている。秀吉軍数万に対し、吉川勢はわずか千だったとされるが、鳥取城で散った吉川経家の弔い合戦に臨むべく、その戦意は高かった。秀吉は犠牲を考慮して決戦を避け、羽衣石城に兵糧と弾薬を補給することにした。峰伝いに輸送を開始する秀吉軍に対し、吉川勢は松崎付近まで出撃し妨害を加えたという。

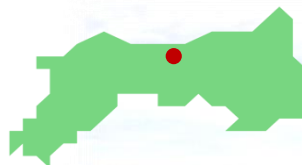
無事に物資を補給した秀吉は陣を引き払い、元春も主力を率いて月山富田城へ帰陣した。両軍は互いの実力を認め合った上で、衝突することなく撤退したのである。

## 国指定史跡

南条氏救援～唯一無二の陣城～

# 十万寺城

じゅうまんじょう



お問合せ

湯梨浜町教育委員会

〒682-0723 鳥取県東伯郡湯梨浜町久留19-1  
湯梨浜町教育委員会事務局生涯学習・人権推進課  
TEL 0858-35-5367 FAX 0858-35-5387  
MAIL yshogai@yurihama.jp

